木村夏樹からロックと言われた僕

おののっきー

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

この物語は高校生の木村夏樹とオリ主の話です。にわかなので多少の粗はこの時空ではそういうこと理論を使います。評価、感想はやる気に繋がるためたくさんお願いします。

目次

第1話 …… 1
第2話 …… 10

第1話

「ふぁ～～～」

大きいあくびを出しながら道を歩く。今日から高校生、しっかりと気を引き締めなければいけないが、あいにく自分はそんな性格ではない。自由に行動するさ。

「……ん？」

通学路、道路を挟んで向こう側。ふと目を向けていたらなにやら騒がしそうだ。私は歩道橋を渡り、何が起きているかを確認することにした。

「……登校初日からカツアゲかよ……」
　目の前ではガタイのいい男三人と、体が細い、見るからに三人よりも弱そうな男が土下座をしていた。
「すみません!!!これで勘弁して下さい!!!」
「…チッ、しらけた。行くぞ。」
　金を巻き上げたのか、男たちは去っていった。周りの人たちは関わり合いになりたくないのか、目線を合わせずに足早に去っていった。男は土下座から立ち上がると近くのおばあちゃんに少し話をしてその場を去っていった。
「へぇ……あいつ、ロックじゃん。」

「はぁ……」

学校初日からやってしまった。朝から不良に絡まれたせいで、クラスメイトからは巻き込まれたくない、という念が伝わるように自分に誰も関わらなかった。自分の性分とはいえ、損な性格であることは自覚している。

「よぉ。小野、だよな？」

声をかけられ顔をあげる。目の前にいたのはつり目が特徴的なハスキーボイスの美人の女子だった。今までろくに女子に、それもこんなに美人に話しかけられたことはなかったため、上げた顔が途中で止まった。

「朝のやつ見たぜ。」

……この人もか。僕が土下座した姿をからかって……

「お前、ロックな奴だな！」

「……は？」

「朝のやつ、おばあさんを助けたんだろ？」
「え……！なんで、それを……」
　そう、朝の出来事、不良に絡まれていたのは僕ではなく、おばあちゃんだった。登校中前を歩いていたおばあちゃんが不良とぶつかってしまい、難癖をつけられているところを目撃してしまった。……僕は、昔から困っている人を放っておけなかった。不良達がおばあちゃんに手をあげる前に、僕はその間に割り込んだ。土下座で。
　そう、土下座で。殴られるくらいなら僕の頭なんて安いもんだ。それにあの場は学校の通学路、見ている生徒はたくさんいた。その場で土下座している人を殴ることはない、と思っていて欲しい!!!その思いが伝わったか、不良はその場を去っていった。殴られずに済んだ僕は一安心し、おばあちゃんからも感謝の言葉を貰ったが、僕は失念していた。たくさんの人が不良を見ていた。ということは、たくさんの人が僕の土下座を見ていた、ということにもなる。その噂が一人歩きし、僕は不良に絡まれていた可愛そうないじめられっ子、という認識になっている。だから、おばあちゃんを助けたことなんて……
「だからあの場で見てたって言ったろ？あのあとおばあさんにありがとうって言われてたじゃねえか。お前が助けたんだろ？不良を前に、勇気あるじゃねぇか。」
「え、いや、その、体が勝手に、というか……」

更に言うならば、僕は今まで女性とろくに話したことがない。なのに、高校初日からこんな美人に話しかけられて、上手く話せるはずがなかった。僕の言葉は途切れ途切れで、歯切れの悪いものとなった。恥ずかしい。顔は相手の顔を見ることが出来ず、机を向くしかなかった。

「体が勝手に…？はっ、いいねえ、ますますロックだ！なあ、放課後時間あるか？」

「あ、はい……」

「ちょっと私に時間くれよ。お前に見て欲しいんだ。私のロック」

「ロック……？」

「あ、言ってなかったな。私は木村夏樹。クラスメイトだ。よろしくな。」

そう言って美人……木村夏樹は、僕に手を差し出す。展開が急すぎて追い付けない。が、握手を求められていることは分かった。僕は焦りながらもズボンで手汗を拭いて手を返す。

「おう！じゃあ放課後に音楽室な。」

じゃあな！と会話を切り上げ木村さんは席に着く。木村さんの席は自分の席からも近くその後ろ姿がしっかりと見えた。……女性と、放課後の約束をしてしまった……。僕はその後のレクリエーションや授業が全く身に入らなかった。

「ここでいいのかな……」
　少し迷いながらも音楽室と書いてある教室を見やる。時間は放課後。生徒はまばらになり人はいない。
「失礼しま～す……」
　小さい声で扉を開けると、中には
「よ、来てくれてありがとな。」
　ギター、だろうか。楽器類に詳しくない自分では判別できないが、ギター（だと思う）を構えて木村さんが待っていた。
「木村さん、それは……？」
「あー……実は私、音楽やっててな。小野に聞いて欲しいと思ってさ。」

「僕に?何で……」
「お前のロックな心に感動してな。お前のこと気に入ったんだよ。だから、聞いて欲しいんだ、私の、ロック!!!」
ギュイイイイイン!!!!
　瞬間、空気が切り替わる。木村さんが弦を掻き鳴らし鋭い音が音楽室に鳴り響く。僕は音楽のことは門外漢だきど、この曲が、この音が、魂に響いていることは分かった。程なくして曲は終わった。木村さんは疲れきったように息を整えていた。
「ふぅ、私の歌、どうだった?」
「すっっっっっごいね!!!!木村さん歌も演奏も上手いんだね!!!!!!!!!」
「うえ?あ、お、おう……ありがとな。」
……やらかしたぁぁぁぁ!!!!!演奏にテンション上がりすぎて気持ち悪い反応になってしまったぁぁぁ………。木村さん引いてるじゃん……
　顔を手で覆った隙間から木村さんの表情を見てみると、ドン引きした木村さん、ではなく、そこには恥ずかしながらも笑顔を浮かべている木村さんがいた。
「いやぁ、そんなに褒められると照れちまうな…。私の歌、そんなに褒められたことなかったから嬉しいよ。ありがとな。」
「あっ、いや、僕の方こそごめん……急に声大きくして……」

「いや、そんなに大きな声出せるんだなってビックリしただけだから。っと、もういい時間だな。今日はありがとな、小野。」
「いや、僕の方こそ、凄い演奏を聴けて楽しかったよ！ありがとう！」
「おう。また明日学校でな。」
その言葉を皮切りにギターを片付け帰る準備を終えた木村さんは音楽室を去っていった。
これは木村夏樹の第1のファンの話である。

すっっっっっっごいね!!!!木村さん歌も演奏も上手いんだね!!!!!!!!!

「へへっ……」

あんなにストレートに褒められたことはなかった。体がむず痒く、自然と足取りが軽くなる。

「小野か……いいやつだったな。」

第２話

あれからも木村さんとは交友が続いている。学校では顔を会わせれば挨拶するし、昼食も一緒に食べる仲だ。

ただ、木村さんは軽音楽部に入り、僕はバイトを始めたため、放課後の交流はほとんどなくなった。

放課後、学校が終われば部活に行くこともなくバイト先へ向かう。僕がバイトしている所は本屋だ。大きいチェーン店のような本屋ではなく、町に一つあるくらいの地域密着型の本屋で、本だけでなく文房具や学習道具、子供向けのおもちゃ等も売っている。あまりお客様で賑わっているとは言えないが、静かな雰囲気が気に入っていた。

「お兄さん！これ下さい！」

「え？あ、分かりました。レジに来てください。」

声をかけてきたのは小学生くらいの女子。髪は肩くらいで中性的な子だ。持っているのはヒーローのおもちゃ。僕も子供の頃はヒーローのおもちゃでよく遊んでたな……。ちなみに、今でも日曜朝早くに起きて見ていたりする。

「へへ〜、これで五人揃って戦えるぞ！」

おもちゃを買っていった子は元気に店を出ていった。元気な声とは裏腹に店では閑古鳥が鳴いていた。……本の確認でもしよう。

静かに客が入ってくる。あの人は……珍しくこの店の常連でもある、黒髪が綺麗な女子高生だ。前髪が長く顔は見たことがない。よくこの店に来て大量に本を買って帰っていくお得意様だ。今日も本を物色している。目当ての本が見つかったのか本棚の上の方に手を伸ばしている。この店は台座の数が少ないため近場になかったのかもしれない。

「お客様、どの本をお求めでしょうか？」
「え、あ、その……という本を……その、すみません……」
「いえ、……これですね。どうぞ。」
「あ、ありがとうございます……」
　その他の本は自分で取れる位置にあったのか苦もなく選んでいって会計を済まし店を出ていった。いつも思うが、両手で抱える量の本を毎度持って帰るのは大変ではないだろうか……

「よっ！」
「……へ？」
　木村さんがやって来た。危うく整理中の本を落とすところだった。そのくらいの衝

撃だった。
「え、木村さん、部活は？」
「今日は休みだ。時間あったから、せっかくだし小野のバイトしてる姿でもからかってやろうと思ってな。……でも、ふーん。様になってんじゃん。」
「本屋の店員が様になっているって言われてもな……」
「ま、いいや。店員さん、何かオススメあるか？」
「うーん……僕が最近ハマってるのはこれかなあ。」
　そう言って僕が差し出したのは流行りのヒーローの卵が成長していくバトルものだ。
僕は友情、努力、勝利！な少年漫画が大好きなのだ。
「お、これ見たことあるな。じっくり読んだことはないから読ませてもらうぜ。サンキュな。」
「あ……あれだったら貸そうか？僕の家にそのシリーズ全巻あるから。」
「マジ？いいのか？」
「うん、明日学校で渡すよ。それでもいい？」
「もちろん！最近小遣いきつくてな……ありがとな。」
「木村さんの頼みだから。全然大丈夫だよ。よかったら今度感想教えて欲しいな。」
「おう。じゃあまた学校でな。」

そう言って木村さんは店を出ていった。クラスメイトにバイトしてる姿を見られるのは気恥ずかしいものがあったが、久しぶりに話せて少し楽しかった。帰ったら早速本を持っていく準備をしないといけないな。

次の日朝、朝会前にぼくは木村さんまで会いに行った。

「木村さん、これ、例の漫画。とりあえず１０巻だけ持ってきた。」

「おお、早いね。ありがとな。帰ったら読ませてもらうぜ。代わりと言ってはなんだけど、これ。貸すよ。」

「これって……ＣＤ？」

「あたしが今一番好きなバンドのやつだ。借りっぱなしはしょうに合わないからな。貸

すよ。」
「うわぁ……！ありがとう木村さん！その本も読み終わったら続き持ってくるから言ってね！」
「そんなにいっぱいあるのか……面白いな、ほら、先生来るからまた後でな。」
「うん、また。」